



魅力あふれる街へようこそ

ペトラ遺跡や死海など、見どころがいっぱいのヨルダン。経済成長のカギとなる観光産業を盛り上げるべく、この国の魅力を高める。ある街に光が当たっている。

ヨルダンでここだけの魅力を生かせ

3 つの丘に、黄色い壁の家々が立ち並ぶ。ヨルダンの人々にとっては、どこか懐かしい雰囲気。それが首都アンマンから車で30分ほどのところにあるサルトだ。

ヨルダン渓谷と東部の砂漠に挟まれたこの街。19世紀から20世紀初めのオスマントルコ時代には、通商の要衝として栄えた。一歩足を踏み入ると、中東とヨーロッパの建築様式が混ざった邸宅が点在し、100年前にタイムスリップしたかのよう。当時の建築物が残るヨルダン唯一の場所として、観光地のポテンシャルは十分にある。

しかし、ここを訪れる人はそれほど多くない。資源が少ないヨルダンにとって、

て、観光は経済発展のカギ。そこで日本は約20年にわたり、アンマン、十字軍時代の遺跡が残る都市カラク、サルト、死海の4カ所で、博物館の建設などを支援してきた。

「サルトは他の場所とはちょっと違うのです」。この国で2003年から観光振興に奔走する萬宮千代JICA専門家（株式会社はいはつマネジメント・コンサルティング）はそう話す。「ペトラ遺跡のように、これ！という目玉があるわけではない。古い街並みに今も人々の暮らしが息づく、生きている文化遺産」なのが最大の魅力なのです。

ただ、それを観光客に伝えるのは難しい。そこで取り入れたのが、エコミュージアムのコンセプトだ。地元の人々の暮らし、街並み、自然……。街中のさまざまな要



街の中心にある広場からモスク、教会などを巡る観光コース「ハーモニートレイル」を歩くツアーを実施



素を組み合わせ、街全体を博物館に見立てるのだ。

「昔は街の入り口に門があったんだよ」

「みんなが新聞を買えなかった時代は、この広場で読みあげてくれる人がいたらしい」

人々が伝え聞いてきたそんなストーリーも、この街の歴史を伝える観光資源になる。そこで北海道大学の西山徳明教授が、かじを取り、一軒一軒訪ねて集めたさまざまな観光資源を、地図に落とし込む作業を始めている。そうすれば、どこに何があるか一目瞭然。それを踏まえて効率的に街を回れる。ディスプレイとレイアウトを、テーマごとに企画しているところだ。



伝統的な生活を体験できるオープンハウス



伝統衣装の着付けも人気だった

住民たちと共につくるフェスティバル

しかし、エコミュージアムは地元の人たちにとっては全くの新しいコンセプト。まずは彼ら自身に

隠れたサルトの魅力を知ってもらう必要がある。

そこで萬宮さんは「サルトフェスティバル」を活用することに。2012年から年に一回のお祭りとして始まったイベントだが、その年に集まった観客はたった100人だった。

もっと多くの人に参加してもらえるイベントにしたい。そこで参考にしたのが、山口県萩市の取り組みだ。古き良き街並みが残る観光地として人気の萩市は、日本でも先駆けてエコミュージアムのコンセプトを実践し、大きな成果を挙げている。毎年、地元の人々

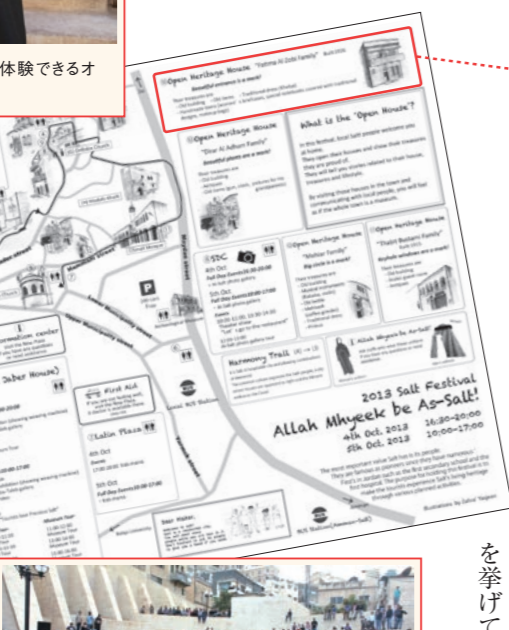
が伝統的な町家で家宝を公開するお祭り。おたから博物館には、国内外から8000人もの観光客が訪れるという。

そこで、サルトの開発に携わるヨルダン観光省の職員が、観光開発のコツを学ぶために萩市へ。おたから博物館を視察して彼らが実感したのは、地域住民を巻き込むことの大切さだった。その学びを生かして、サルトフェスティバルでも地元の人から協力者を募り、伝統衣装の着付け体験や歴史ある家屋を公開してもらおうオープンハウスなどを企画した。

そして2013年10月、サルトフェスティバル当日。広場では伝統舞踊や詩の朗読が披露され、サルトの陶器など民芸品を販売する出店が並んだ。オープンハウスを訪れると、住民たちがウエルカムコーヒーで迎えてくれるなど、サルトの強みである懐かしい雰囲気を感じられるイベントになったのだ。

「来場者はなんと4000人。こんなに来てくれるなんて！と、観光省や地元の人々は大喜びでした。でも、いつでも観光客を引きつける街にするためには、まだまだやる必要があります」と萬宮さんは話す。

世界中からの観光客を笑顔で迎えるために、今、サルトの人々は動き始めている。



広場で行われたイベントの一つ、伝統舞踊

2013年のサルトフェスティバルでは、街のあちこちで催しが行われた

[右] 北海道大学の西山教授(右奥)らが、掘り起こされた観光資源を地図に当てはめていく
[左] サルトフェスティバルの打ち合わせをする萬宮さん(左)。「予算が足りなかったり、ポスターの印刷が間に合わなかったりと、てんやわんやでした」

